

家庭的養育の理念に基づく児童施設の実践例

－SOS子どもの村－

金子 龍太郎

1. 子どもの村創立の背景

子どもの村 (Kinderdorf) は第二次世界大戦後の欧州に設立された、それまでの多くの孤児院とは理念や形態の異なる施設である。当時、欧州においても戦災孤児や浮浪児の数が激増し、そうした子どもたちを救うために、数多くの児童福祉施設が運営を再開したり、新たに活動を始めたが、その多くは旧態依然の大集団での養育法をとっていた。その中にあって、家庭教育の理念－親に見捨てられた子どもや家庭に恵まれない子どもに、再び新しい親と家族を与え、一般家庭にできるだけ近い環境で育てよう－に基づいた養育形態の子どもの村が各国で建設された (Hörburger, 1967)。

最初の子どもの村はスイスのトローゲン市に作られたペスタロッチ子どもの村であった。これは Corti, W. R. が1946年に創立したもので、10人前後の子どもを夫婦職員と共に家庭的環境の元で養育する形態をとっていた。ペスタロッチ子どもの村では様々な国から亡命してきた子どもたちを受け入れたため、子どもの村の存在が世界的に知られる契機となったのである。こうしてペスタロッチ子どもの村はドイツを初めとして欧州各国に広がった。後にオーストリアで行われた、SOS 子どもの村の創立記念式典に Corti が招待されて祝辞を述べているところからも、当時ペスタロッチ子どもの村がこの種の施設において指導的立場を有していたことが伺える。また、ドイツにおいては、同じく1946年にカトリック組織のカリタスがセカッハという田舎町に、Magnani, H. (1899－1979) を中心として、子どもと青年の村クリンゲ (Kinder- und Jugenddorf Klinge) を創立した。

こうした子どもの村の中に、1949年にオーストリアのイムストという山村に設立された SOS 子どもの村がある。当時インスブルック大学の医学生であった Gmeiner, H. (1919－1986) は戦後の孤児育成に大きな問題があることに気づき、これまでの孤児院では見捨てられた子どもたちを救えないと考えていた。そして、Pestalozzi 等の教育者から学んだ家庭教育に基づいた養育方法として、子どもの村の形態を採用した。家庭教育に基づいた理念は Pestalozzi の影響が強く、一戸建ての家に少人数の子どもを生活させる形態と職員の養成は Wichern に学び、母親代わりの婦人を子どもの養育の中心においたことは von Tiele-Winkler の方法を受け継いでいるといえる。

SOS 子どもの村は、日本でいえば乳児院と養護施設が結合した形の、小舎制の入所施設である。一軒の家には乳児から青年まで、最大8名の子どもたちと母親代わりの婦人が生活してお

金子 龍太郎

り、そうした家が十数軒集まって共同体－「村 (Dorf)」－を形作っている。発祥国のオーストリアには各州に1つずつの計9か所の SOS 子どもの村があり、1985年現在763名の子どもがいる (図1, 2)。また自立援助ホームには200名の14歳から26歳までの青年が生活している (図

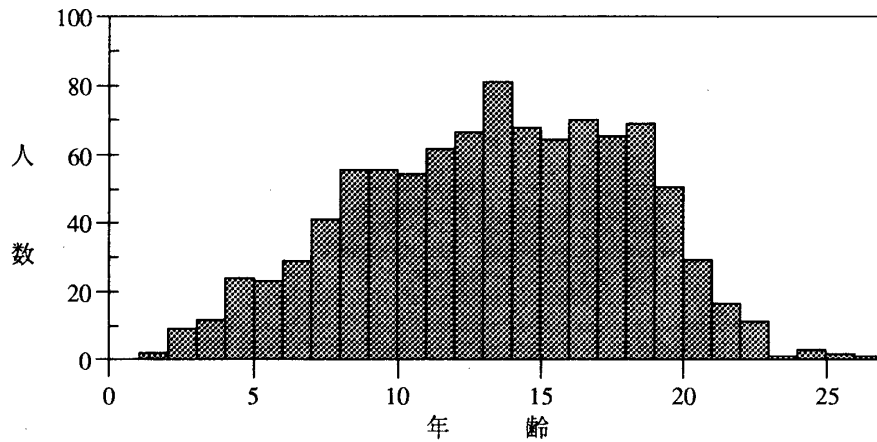


図1 SOS子どもの村と自立援助ホームの年齢構成 (1985年)

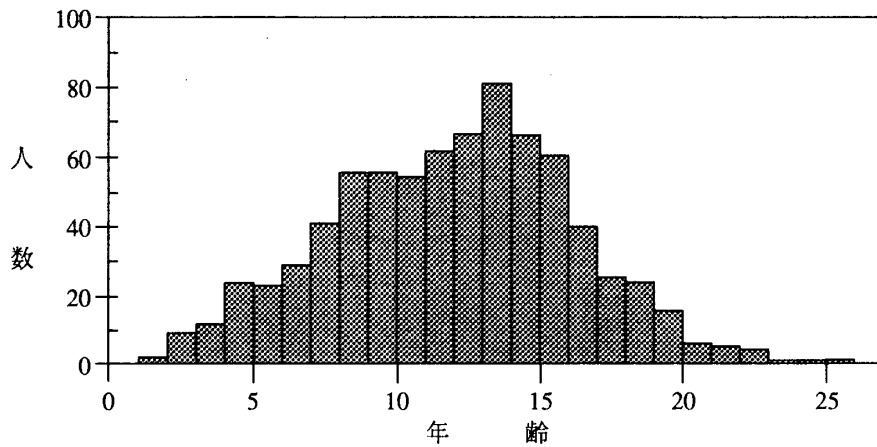


図2 SOS子どもの村の年齢構成 (1985年)

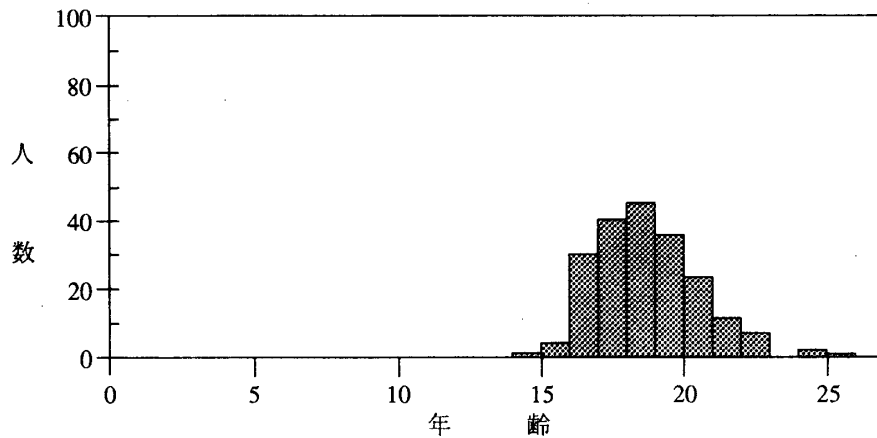


図3 自立援助ホームの年齢構成 (1985年)

3)。今日では全世界に500万人以上の会員を擁し、103か国に238の SOS 子どもの村と500近くの関連施設を持つ、世界有数の児童施設に発展している (Hilweg & Posch, 1987)。

2. 創始者 Hermann Gmeiner の略歴

Hermann Gmeiner は1919年にオーストリアのチロル州にある山村の農家に、男5人と女4人の9人兄弟の5番目に生まれた。しかし、彼が5歳のときに母親は死亡し、それ以後長女が母親代わりとなった。幼いときに母親を失ったこの体験が、後に「おかあさん」の存在を重視する、SOS 子どもの村の理念と実践に大きく影響することとなったのである (SOS-Kinderdorf Verlag, 1988)。

当時の貧しい農家の中であって、Gmeiner 一家の生活も決して楽ではなかった。特に1930年代に通貨の価値が半減して、そのため担保を抱え、家も農場もほとんど手放すことになり、姉たちは外に出て働き、弟妹たちも重労働に従事したが、負債を返すのは容易ではなかった。彼はこうした体験を通じて、罪はないのに苦境に陥った家族の運命に耐えることを学んだ。

Gmeiner の学業成績は良く、特にドイツ語と算数が得意で、彼の心の中には学問への志が芽生えていたが、これは家庭の経済状態を考えるととてもかなえられない望みであった。しかしながら、最終的には奨学金を得て、フェルド・キルヒェ市のギムナジウムに入学できた。彼は幼少期から自然を友として、わずかな時間にも冬にはスキー、夏にはサイクリングにいそしみ、道路を疾走する彼の自転車は「黒い野生馬」と呼ばれていた。また、帰省の折りには家の前のベンチに座り、長い時間アルプスの山々を眺めていたものだ。

ところで、1940年には兵役についたため学業の中断を余儀なくされたが、その当時から彼の心の中には、戦争が終わったら医者になり、苦しんでいる同胞を救いたいという気持ちが起こってきた。終戦後、インスブルック大学医学部に特別学生として籍をおいたが、故郷の農場を手伝うために1946年まで学業を中断せざるを得なかった。しかし、同年の冬季学期から正規の学生として復学し、最初の試験から成績が良く、教授たちに好意的に受け入れられた。この頃から Gmeiner は社会事業に没頭していき、インスブルックの牧師に非行青少年を救う会を創立することを申し出た。最初はとまどいがちであった牧師を説得して、最終的には設立の同意を得た。青少年の多くは両親がいない、見捨てられた子どもたちで、いずれも社会からのけものにされ、一人で社会に立ち向かわなければいけない子どもたちだった。こうした青少年の仕事に携わっている間に、Gmeiner は孤児院や養育施設の動向に興味を持つようになった。彼は当時の孤児養育施設が子どもの生活する場所として不適切で、心身共に傷ついた子どもたちを救う場にはならないことを見抜いていた。後に、Bowlby が1951年に WHO の報告書をまとめるために訪問調査した、第二次世界大戦後の孤児院はほとんど、Gmeiner が失望した類の施設なのであった。

青少年育成の実践のうわさが広まり、多くの人々に Gmeiner の活動が知られていった。やがて彼は、インスブルックの司教区青年部の責任者に任命された。この仕事は大変困難な仕事で

金 子 龍 太 郎

あったため、睡眠も十分とることもできない状態が続き、一年間が大学と青少年育成の仕事との狭間の中で、葛藤のもとに過ぎ去った。この時期はとても苦しい時期ではあったが、青少年育成の仕事は彼に幸福感をもたらした。すなわち、自分が良い事をしているという実感と真の支持者を得たという気持ちである。そしてこの事業を発展させるために教育学の勉強を開始した。彼は子どもに愛情を抱いていない親たちが世の中にいること、そうして両親から拒否された子どもたちがたらい回しにされて、最後には施設か少年院に入れられることも目の当たりにしてきた。母親のいない子どもには未来はないと考えており、彼の心の中には親に見捨てられた子どもたちを救い育てようという決心が徐々に育っていったのである。そして教育者・人道家 Pastalozzi の生き方と理念の研究に没頭していった。

また、その当時に手本となった人物はインスブルック大学の外科教授の Breitner 博士であった。教授は第一次世界大戦時のシベリア捕虜の救世主であり、オーストリア赤十字の総裁として社会福祉を熟知しており、Gmeiner は多くの知識を彼から得たのであった。しかし、教授は福祉に大きな望みを持つことを止めるようにと忠告した。にもかかわらず、Gmeiner は人類のために良いことをしようという自分の決心を翻さなかった。ここにおいて自分の一生の使命を見つけたのである。

Gmeiner は1949年の4月に数人の仲間とともに Societas Socialis (SOS) を創立した。SOS は青少年のための慈善団体で、青少年を保護するための組織であった。まず、インスブルックの郊外に仮事務所を開き、そこで宣伝用の資料を作成した。それを見て、大戦で戦死した息子の母親である Didl, H. が協力を申し出てきた。彼女は新しい青少年保護団体の代表が若年の大学生だと知って驚いたが、最初の協力者として、そして最初の SOS 子どもの村の「おかあさん」として共に活動を進めていったのである。さらに協力者を集め援助金を得るために、彼らは1949年の冬に多量のクリスマス・カードを発送することを計画した。発送作業のためにはより大きな事務所が必要になり、Gmeiner はスイスからの寄付により、大きな果物倉庫を手に入れた。その建物は12の机と長椅子を持つ事務所と発送作業場となり、大学の友人や牧師や婦人会の人々などの協力者たちが夜遅くまで立ち通しの作業に従事した。その時の全資金は600シリングで、そのお金で募金のよびかけと援助を求める新聞広告代金をまかない、子どもの村の建築資金を徐々に集めていった。また Gmeiner は、オーストリアの国中到處へ自転車で乗りつけ、子どもの村にふさわしい土地を捜し求めた。最終的に最も気に入った所はチロル州のイムストという村だった。その Koch 村長は彼自身孤児であって、Gmeiner の計画のために協力を惜しまなかった。さらに、SOS の活動初期からチロル州の経済界は積極的に協力してきた。特に、会長の Geschrieber 博士は SOS 子どもの村の財政基盤の確立に努め、あらゆる手段を講じて SOS 子どもの村のために尽力を惜しまなかった。

Gmeiner にとってイムストとインスブルックは重要な場所となった。忠実な協力者である Haider, F. (現在 SOS 子どもの村ウィーンの森の村長) は、SOS 子どもの村イムストとインスブルックの協会との間を何度も行き来したものだ。当初 Gmeiner は子どもの村イムストの

村長として、自分の理念を実践することに全力を注ぎ、特に「おかあさん」の育成に力を入れた。そのうち子どもの村イムストの運営は軌道に乗り、協力者も増加して、その仕事を彼らにまかせて、Gmeiner は次々と新しい子どもの村建設のため、オーストリア国内、さらにはヨーロッパ各国へと新たな課題に向かっていくのであった。その後、SOS は「Save Our Souls (我々の魂を救いたまえ)」という意味を有する、国際的な社会事業組織として発展していった。そして1986年の4月に突然の死を迎えるまで、終生独身で家族を持たず、持病をおして SOS 子どもの村のために世界を駆け巡った生涯であった。SOS 子どもの村イムストにある最初の子どもの家の壁には、彼の言葉「多くの人の援助があれば、良きことはたやすくできる (Es ist leicht Gutes zu tun, wenn viele helfen.)」が残されている。

3. SOS 子どもの村の理念と実践

SOS 子どもの村は戦争という混乱の時代だけでなく、平穏な時代においても、家庭に恵まれない子どもたちを引き取って育ててゆくという主旨で創設された。施設があらゆる点で普通の家庭に近いかたちをとることによって、子どもを教育してゆくことを基本理念とする。

SOS 子どもの村に入ってくる子どもたちの養育と教育には、なによりも受容の心が必要とされる。母親に対する基本的な信頼関係を子どもの村で再び保証することによって、初めて教育的に大きな影響力が発揮される。教育は子どもと生活を共にし、悩みや喜びを分かち合うことから始まる。自分がこの人に愛されている存在であり、この人なら安心して信頼できるという思いを子どもに与えること、これが「おかあさん」の役目であり、後々の SOS 子どもの村で行う教育の土台となる。そして、子どもの村の教育の最終目的は「要養護児童の一般社会への自立」であり、彼らが社会人として自立し、家庭を持ち、子どもを自らの手で育てることができて初めて、その目的が達成されたと考えるのである。

SOS 子どもの村の理念は単純である。それは、親に見捨てられたり、家庭に恵まれない子どもに再び家庭をあたえようという考えで、次の4つの基本理念から成り立っている。これらの考えは部分的には過去の孤児教育に取り入れられてきたが、それらを初めて Gmeiner が統一して実践に組み込んだ。彼はこう語っている。「SOS 子どもの村の理念は単純です。しかし、私はこの理念より良い理念を知りません」と。彼は子どもと親代わりの職員と一緒に生活する中で、家族共同体による教育が基本だと考えたのである (Gmeiner, 1985)。

(1) おかあさん

SOS 子どもの村で養育を担当するのは未婚か離婚した婦人で、将来結婚せずに、家庭に恵まれない子どもたちのために一生働くことを契約した人である。夫がいたり、自分の子どもを持つ婦人は子どもの村の「おかあさん」にはなれない。そして一軒の家で子どもと生活を共にすることを求められる。こうした婦人の元で、SOS 子どもの村の子どもたちは心の拠り所を得て、安心して生活できる。ここにおいて、母親を求める子どもと子どもを求める婦人との双方

金子 龍太郎

の要求が合致する。「おかあさん」を希望する婦人のほとんどは様々な仕事に就いていた、25歳から40歳位までの人々である（Then, 1985；表1，2）。それまでの職業に物足りない点を感じ、子どもと共に生活し母親代わりをすることで、精神的に充実した職業を求めてきた婦人たちである。また、SOS子どもの村では子どもと永続的な絆を結べることも志望の大きな動機である。志望者は非常に多く、一人の採用に対して百人以上応募してくることもある。

表1 「おかあさん」担当時の年齢

年 齢	人 数	割 合
21-25	7名	4.6%
26-30	47	30.9
31-35	59	38.8
36-40	33	21.7
41-45	6	4.0
合 計	152名	100.0%

(1984年)

表2 「おかあさん」の職歴

職 業	人 数	割 合
教育関係	11名	7.2%
保育・看護	39	25.7
農業・家事	20	13.2
O L	79	52.0
その他	3	1.9
合 計	152名	100.0%

(1984年)

その選考は人物本位で行われ、資格は問われない。しかしながら、何よりも心身共に傷ついた子どもたちを受け入れる受容性と愛情が不可欠である。そして理論だけでなく、子どもと共に生き、日常生活を通しての教育実践を行える人が求められる。SOS子どもの村の「おかあさん」は、子どもの手本となりうる人格を有し、明朗で健全な精神を持ち、宗教的にもしっかりとした女性が望ましい。「愛情と手本」が子どもの教育に大切なのである。専門職としての知識と技術は、採用後に2年間の養成期間の中で培われる。そのうち1年間はドイツのメルバッハにある「おかあさん」養成学校に通い、一般教養・医学・法律・音楽・家政と共に、発達心理学・教育心理学・治療教育学等の専門教科の講義を受け、筆記試験も課せられている。この課程が終了したら、複数のSOS子どもの村での1年間の実習が待っている。SOS子どもの村に入ってくる子どものほとんどは、親に見捨てられて生活場所を転々として、人間不審に陥っている場合が多い。そうした精神的病理を見抜き、専門的に対応して援助するためには高度の専門能力が求められるのである。

仕事内容は一般家庭の母親と変わらない。乳児から思春期までの、様々な年齢の8人までの子どもたちを一人で世話するのである。そして家事一切を行い、子どもの勉強をみてやり、甘えを受入れ、悩み事の相談相手にもなる。家の運営をすべて任されているので、予算の管理・運営も重要な仕事である。子どもたちと終日過ごすので勤務時間は24時間と考えてよいが、主に朝と夕方の6，7時間を中心に仕事を行う。日中には年長の子どもたちは幼稚園、小・中学校に行くので、残った乳幼児とゆったりした時間を過ごす。休暇は1年間のうち約1か月あり、主として夏期にまとめてとっている。夏期には小・中学生はイタリアにキャンプにいき、その間に骨休めができるのである。

「おかあさん」の就業年齢は25歳以上で定年は55歳であり、定年後は子どもの村の中にある宿舎で生活する。そのため子どもの村を卒業して一人前の社会人になった、かつての子どもたちはいつまでも「おかあさん」を訪問できる。

(2) 兄弟姉妹

家では乳児から20歳位まで様々な年齢の子どもたちが一緒に生活している（表3）。実の兄弟姉妹でも血のつながりのない場合でも、まるで本当の兄弟のように一つ屋根の下で生活できるのである。そして男子と女子も一緒に暮らす。性別、年齢を問わず一緒に育てるという「男女共同育成方式」のために、実の兄弟姉妹も離れ離れにならなくてよい。実の兄弟姉妹の密接なつながりを切り離してしまうことは、時として子どもの情緒を深く傷つけることになる。こ

表3 SOS 子どもの村ケルンテンの家族構成

番号	おかあさん	子 ど も	計	合計
1	36歳	男－5歳、6歳、10歳、10歳、13歳、16歳、19歳 女－0歳	7人 1人	8人
2	57歳	男－11歳、13歳、21歳 女－13歳、14歳、16歳	3人 3人	6人
3	58歳	男－11歳、14歳、14歳 女－8歳、14歳	3人 2人	5人
4	57歳	男－8歳、11歳、12歳 女－14歳、14歳	3人 2人	5人
5	53歳	男－9歳、10歳、15歳 女－12歳、12歳、13歳	3人 3人	6人
6	43歳	男－8歳、10歳 女－4歳、10歳、11歳、12歳、15歳	2人 5人	7人
7	55歳	男－10歳 女－10歳	1人 1人	2人
8	43歳	男－12歳、13歳、14歳	3人 0人	3人
9	57歳	男－8歳、10歳 女－9歳、12歳、12歳、14歳、17歳	2人 5人	7人
10	ベトナム人 一家	男－13歳、15歳、17歳、19歳、23歳 女－16歳、19歳	5人 2人	7人
11	40歳	男－1歳、6歳、6歳、13歳 女－3歳、5歳	4人 2人	6人
12	29歳	男－0歳、5歳 女－7歳、8歳、10歳、13歳	2人 4人	6人
13	41歳	男－7歳、9歳、12歳、13歳、14歳、16歳	6人 0人	6人
14	35歳	男－3歳、8歳、9歳、11歳、17歳 女－7歳、10歳、15歳、23歳	5人 4人	9人
合 計		男子 49人 女子 34人	総計 83人	

(1990年6月現在)

金 子 龍 太 郎

うして、実の兄弟姉妹が一つ屋根の下で生活している家庭は SOS 子どもの村の50%にも及ぶ。また、一定の年齢が来て部屋の移行や施設変更を経ることなく、同じ生活環境の下で一人の「おかあさん」と継続した人間関係が保てる。

この兄弟姉妹関係によって豊富な人間関係が保証される。年少児は年長児の行うことを見て模倣をして、様々な事柄を学習する。一方、年長児は年少児を可愛がったり、面倒を見たりする。また、男子と女子が一緒に生活することで健全な性意識が育つ。そして男子は15歳頃、女子は18歳頃になると自立のための家に移る。

(3) 家

子どもたちが安心して過ごせる場として家は重要で、心の傷を癒すためには安らぎが必要である。SOS 子どもの村の家はすべて一戸建て2階建てを原則としており、自然に恵まれた敷地と調和した家は、質素すぎず華麗すぎず、住み心地の良さを主眼において建てられている。家の設備を簡素にする理由は、寄付金や援助金を少しでも多くの子どもの養育費に充てるためである。また教育的見地からしても、平均的な生活水準の家庭で子どもたちを育てるのが望ましい。子どもたち自身が将来自分の家庭を作るとき、平均的な生活をしていれば適応が容易であろう。そうした理由で、SOS 子どもの村の住居は一般労働者やサラリーマンの住宅レベルで必要十分なのである。

各家の1階には居間・食堂・台所・「おかあさん」の部屋があり、2階には子どもの部屋が3部屋・風呂・勉強室、そして補助職員のための個室が備わっている。台所では「おかあさん」が食事を作る姿を示し、ソファやピアノなどのインテリアが置かれた居間では皆が団欒の一時を過ごす。Pestalozzi が著書の中で繰り返し述べているように、居間は人間教育・家庭教育にとって大切な場所で、そこで子どもたちは文化の大切さや美德を学んでいく。また、家の周囲にめぐらされた庭には花壇や菜園が作られ、職員と子どもたちが育てて楽しむ。

表4 就学状況

学 校	人 数	割 合
小学校（1－4年生）	225名	30.5%
中学校（5－9年生）	212	28.8
特殊学校（養護学校）	68	9.2
普通高等学校	25	3.4
高等工業学校	22	3.0
職業高等学校	22	3.0
各種専門学校	32	4.3
定時制職業学校	126	17.1
大 学	5	0.7
合 計	737名	100.0%

(1985年)

(4) 村

SOS 子どもの村の建設場所には風光明媚な都市近郊が選ばれる。自然の豊かな場所で、近くには森や湖や草原、さらにはアルプスの山々がそびえていて、子どもたちは思う存分に自然と親しむことができる。子どもの村では十数軒の家が集まって村を形成しており、子どもの社会性を育む場となっている。他の家の子どもたちとの触れ合いから始まり、計画的に設けた様々な活動によって共同体を形成する。子どもの村には独自の幼稚園はあるが、小・中学校は置かず、子どもたちは近くの公立学校へ通う（表4）。その理由は子どもの村が孤立社会にならないため、SOS 子どもの村の立地条件は民家に隣接した場所が選ばれ、公立学校に通うことで近隣住民との関わりが保てる。美しい立地条件のために近所の人々が散歩にきたり、小・中学校からは見学を兼ねた遠足にやって来る。村の代表者として村長の役目も重要で、各家の相談役となり、職員を援助することで村の秩序が保たれる。

ここで職員の役割を簡単に説明しよう。日本のように福祉を学び、その資格を持っている人は少ない。仕事は分担され、各自はそれぞれの分野の責任者として専門的な業務をこなしている。

村長（Dorfleiter）－子どもの村全体、および人事管理を取り仕切る指導者で、職員、特に「おかあさん」の心の支えとなる。また父親役の多くを占める。

おかあさん（Mutter）－子どもと共に生活を送る中で、教育という仕事の中心を占める。子どもに対して愛情深く、心身共に病む子どもを教育する能力が求められる。

おばさん（Tante）－「おかあさん」が病気になったり、休暇に入るときに、代わりに子どもを養育する。また、小さい子どもの多い家を援助する。

親方（Dorfmeister）－建物や庭の手入れを行う。運転手もこなし、各種労働を通して子どもたちに男性役割を示す。国家試験で認められた技術者の資格を持ち、村長の補佐役である。

教育者（Pädagoge）－学習に遅れが見られる子どもの援助や問題を持つ子どものへの対応を行う。レクリエーションや子ども会のまとめ役でもある。スポーツや音楽を子どもに教えることもある。

心理学者（Psychologe）－子どもが入所するときに判定・面接を行い、指導方針を立てて村長や職員に助言する。また、養育が困難な子どもに対して適切な治療を行う。

幼稚園職員（Kindergärtnerin）－3歳から6歳までの幼児を同一クラスで保育する。近隣からの子どもも受け入れている。また、日中の保育をすることにより「おかあさん」の援助も行う。

秘書（Sekretärin）－村長の片腕として、電話の応対、手紙のやりとり、見学者の案内など数々の仕事をこなす。

洗濯係（Wäscherin）－裁縫・洗濯の仕事をこなし、「おかあさん」の雑用を分担する。

その他－施設内の店の運営、退職「おかあさん」の住居の管理、職員の昼食の準備、ゲスト

・ハウスの管理などに多くの人々が関わっている。

SOS 子どもの村は純民間施設であり、経費の大部分は寄付によっている。そのために、広く国民にPRしており、実に多くの人々から援助を受けている。それは現金、品物、土地、家など様々である。たとえば SOS 子どもの村ウィーンの森は、ウィーン市街から車で1時間程のウィーンの森の中の閑静な住宅街にある。首都に近く地価の高い高級住宅街の中で約60,000m²の敷地を有する。この土地は以前侯爵の土地であったが、持ち主が Gmeiner の事業に共鳴して1シリング（約11円）で譲渡したそうである。

SOS 子どもの村は、すべての要養護児童を受け入れるわけではなく、入所する子どもは、6歳以上の場合が多く、次の様な理由を持っている。①家庭環境があまりにも悲惨なため、青少年保護局の判断により、将来にわたって他人の養育に任さざるを得ない場合。②子どもの年齢が10歳以下であり（弟妹がいる場合は10歳以上の子どもでもよい）、精神的にも肉体的にも一つの家庭で受け入れられる条件を備えている場合（図4）。

それに対して、次の場合は対象外となる。①特殊な児童施設がふさわしい、重度の精神的、肉体的障害のある子ども。②10歳以上の子ども。③実母の疾病、家庭の一時的崩壊のために一時的に預けられるが、いずれは家庭に引き取られるべき子ども。④子どもが父母に強い愛情をもっており、これを断ち切れない場合。SOS 子どもの村のように、子どもを「おかあさん」の元にしっかり結び付けて、強い関係をつくろうとする施設では、このような子どもは順応できないと考えている。

SOS 子どもの村の大きな特徴として、様々な付属施設が備わっており、子どもの発達を長期間、包括的に援助できる点が挙げられよう。まず、青少年の家（自立援助ホーム）では年齢にこだわらず、自立できるまでホームにとどまれる。従って、20歳以上の青年もそこに生活し、職場や大学に通っている（図3）。義務教育を終えたばかりの子どもたちに、これから先は自分

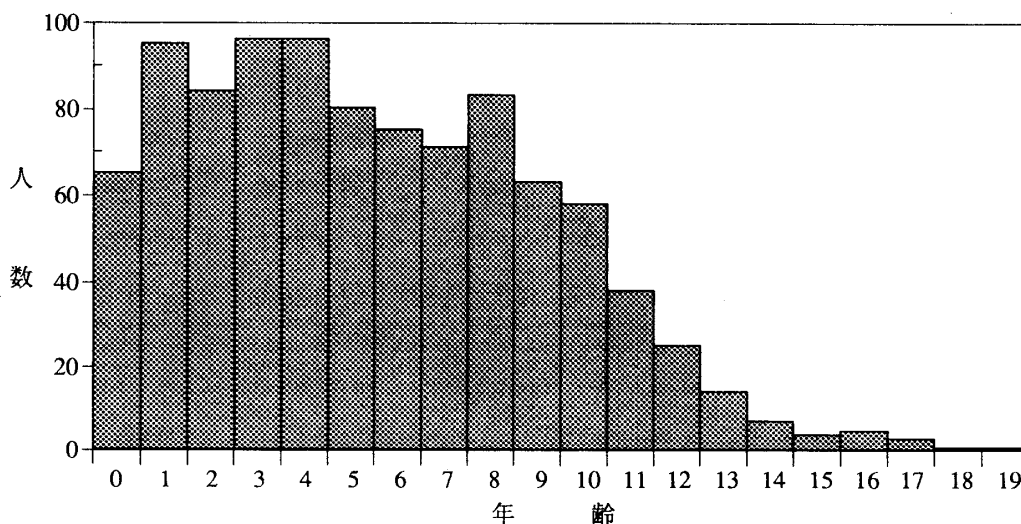


図4 入所時年齢の分布（1985年）

だけでやっていかなければならないとするのは無責任といえよう。まだ家族の後楯が必要な時期なのである。この時期をうまく乗り切らなければ、SOS 子どもの村での教育成果が無に帰してしまう危険性がある。子どもの村では、15歳になった少年は青少年の家に入ることが当初から決定されていた。女子の場合は原則として、義務教育をおえてからも「おかあさん」の元に残り、職業学校に通い、技術を身につけることになっている。学校に通っている青少年は、卒業するまでこの青少年の家にとどまれる。このように、青少年の家で年齢や職業にかかわらず、自立への準備を余裕を持って行うことができる。そのため、SOS 子どもの村の子どもたちには様々な道が開けていて、手工業の道を進むことも、会社や官公庁に入ること、あるいは大学で研究を続けることもできる（表5）。週末や休日祭日にはきまって自分の家族の元に帰ってくる青年たちは、幼い弟や妹の誇りにもなる。こうして、この青少年の家こそ、総合組織としてのSOS 子どもの村に欠くことのできない構成要素を占めている。

表5 就業状況

種 類	人 数	割 合
工 業	35名	19.0%
商業・運輸業	36	19.6
一般企業	25	13.6
鉱 業	22	12.0
サービス業	34	18.5
その他	26	14.1
不 明	6	3.2
合 計	184名	100.0%

(1985年)

また、SOS 子どもの村においては治療教育 (Heilpädagogik) を設立初期から重要視してきた。ウィーンの森の村では、児童精神医学者の Asperger, H. が治療教育所の設立に貢献し、その後も治療教育の指導に当たっていた。子どもの村に入ってくる子どもはすべて精神的に傷ついているという考えの元に専任の精神医学者と心理学者を置き、判定・助言・治療に携わっている。世間一般には、親に捨てられた子どもは「親の悪い遺伝的要素をもっている」ということで、治療教育をする労力を惜しむ傾向がある。しかし、子どもが被っている障害は、複雑な家庭事情や劣悪な生活環境にも起因する。子どもたちの障害を彼らの「素質」のせいにしてしまうことは慎まなければならない。

さらに、退職「おかあさん」のための住居もあり、55歳以後の定年後も子どもの村の中で生活でき、SOS 子どもの村の援助をしたり、社会人に成長したかつての子どもたちが訪れる場所ともなっている。SOS 子どもの村ウィーンの森には、平均年齢60代後半の6名の退職「おかあさん」が「子ども」や「孫」の写真に見守られて余生を送っている。

一般養子の受入れ家庭の利点と、児童施設の利点をできるだけ取り入れたのが SOS 子どもの村であり、養子受入家庭と施設の欠点を取り除こうとしている。一般的に、家庭に恵まれない子どもにとって、養子や里子として新しい両親と家庭が得られることが最も望ましいことであろうが、養子縁組や里親の数は限定される。また、養子や里子に行っても養い親とうまくいかずに、再び施設に戻る場合がある。そうした子どものための最後の拠り所として SOS 子どもの村は存在する。また、各種専門職員の元で、養い親では対処できない様々な問題に取り組めるところにこの施設の意義があるといえよう。そして、各国の研究所において、実践成果を定期的に報告書や各種出版物として明らかにしている点も大きな特徴である (Raithel & Wollensack, 1980 ; Hilweg & Posch, 1987)。

4. SOS 子どもの村の養育効果

施設で成長した子どもが成人後定職につき、家庭生活を維持して子どもを自ら育てているか否かが、最も主要な養育成果の指標である。SOS 子どもの村の最終目的は、施設二世を生み出さないことだと明示している。その養育成果を確かめるために、SOS 子どもの村出身者の追跡調査が行われた (Raithel & Wollensack, 1980)。

調査対象者は、旧西ドイツの12の SOS 子どもの村に、1958年から1961年に入所した297名のうち、1946年から1954年の間に出生して、調査時に22歳以上の180名であった。その中から、調査から除外された23名を除いた157名について住所を調べたところ、83%にあたる130名で判明した。最終的には、様々な理由で面接不可能であった16名を除いた、114名について面接による追跡調査が行われた。ここで、退所者の住所判明率が80%以上と高い点が評価されよう。対象者の平均年齢は26歳であり、入所理由は表6の通りであった。様々な理由で、家庭で育てられない10歳までのケースで占められており、親元に帰さない方が良いと裁判所に判断された長期入所児がほとんどである。

表6 入所理由

理 由	割 合
両親の死亡	8%
片親の死亡	18
養育拒否	12
養育不適切 (放任・虐待)	37
養育困難 (病気・拘留・高齢)	17
施設での長期入所が不適切な例	31
保育所・託児所入所が不適切な例	23
兄弟姉妹を離さないため	12

(多肢選択)

対象者は、幼児期か学童期に SOS 子どもの村に入所しており、その平均年齢は8.7歳であった。SOS 子どもの村では、入所できるのは原則として10歳までだが、妹や弟と一緒にいる場合には10歳以上でも入所している。その後、中学卒業か一人前になるまで、子どもの村に平均7.7年とどまり、義務教育を終えて就職している。高等教育を受ける割合はかなり低く、実業学校に進学したり手に職をつける場合が多い（表7）が、これはドイツ全体の傾向である。次に、就職後の転職回数は平均3.4回と多く、転職がないのは13%にすぎない。転職が1，2回は13%、3，4回が32%、そして5回以上の者が32%であった。このように転職は多いが、失業中の者は少なく、何かの職についている。その職業の内訳を見ると、単純労働者よりも資格を有する専門的職業や公務員が多く（表8）、彼らの親の職業と比較すると社会的地位は高い。

表7 学校教育

	全 体	男	女
修了者	84%	72%	95%
心身障害児特殊学校	(5)	(7)	(2)
中学校（5－9年生）	(60)	(52)	(70)
実業中等学校	(12)	(7)	(17)
単科大学・高専	(7)	(6)	(6)
中退者	15%	28%	2%
心身障害児特殊学校	(1)	(0)	(2)
中学校（5－9年生）	(6)	(12)	(0)
実業中等学校	(6)	(12)	(0)
ギムナジウム	(2)	(4)	(0)
不 明	1%	0%	3%

また、半数の対象者が結婚しており、婚約中を加えると57%になる（表9）。既婚者の多くは、配偶者として両親か片親の元で育った人を選んでおり、施設で育った人を選択するケースはない（表10）。また、彼らの子どもの90%は自分の手で育てており、自分の子どもを貧困や養育拒否のために施設に送り込む、いわゆる施設二世がほとんどいないことが特筆すべき点であり、施設に預けているのは2%にすぎない（表11）。この事実より初めて、SOS 子どもの村の養育効果が高いことが証明されたといえよう。

施設出身者は、多くの場合自分の過去を隠したがるものだが、SOS 子どもの村出身者の場合は施設の社会的認識が高いためもあり、70%以上が同僚や友人に自分がかって SOS 子どもの村で育ったことを話している。しかしながら、半数の者が施設に対する偏見を感じている。

金子 龍太郎

表8 職業

	全 体	男	女
自営業	8%	5%	10%
・農 業	(1)	(0)	(2)
・零細自営業	(3)	(2)	(4)
・自由業	(4)	(3)	(4)
一般社員	35%	23%	52%
・現場従事者	(21)	(14)	(30)
・専門職	(14)	(9)	(22)
公務員	4%	5%	3%
労働者	45%	63%	19%
・単純労働者	(7)	(9)	(4)
・専門技術者	(19)	(22)	(15)
・監督者、マイスター	(19)	(32)	(0)
不 明	8%	3%	15%

表9 婚姻状況

	全 体	男	女
独 身	31%	39%	21%
婚約中	7	9	4
既 婚	50	40	64
同 棲	5	9	0
別 居	1	0	2
離 婚	4	1	9
不 明	1	1	0

表10 配偶者の生育場所

	既婚者（63人）	
両 身	56人	88%
母 親	5	8
父 親	1	2
新 戚	1	2
施設・里親	0	0
不 明	0	0

表11 調査対象者の子どもの生育場所

	全（49名）	男（20名）	女（29名）
両親の元	90%	85%	93%
祖父母の元	2	0	4
SOS-Kinderdorf	0	0	0
他の入所施設	2	5	0
養子縁組	2	0	3
その他	4	10	0

最後に、過去の自分の人生に対してはある程度満足しているのが45%で、半数以上の者が過去の自分の人生に満足していない。しかしながら、現在の生活水準に対しては、98%が自分を中流とみなしており、さらに、将来の人生に対しては、ある程度期待している人が85%に及んでおり、将来への希望が明るい点が特徴といえよう。

5. SOS 子どもの村と他の子どもの村との比較、及び問題点

欧州には SOS 子どもの村以外にも様々な子どもの村が存在している。例えば旧西ドイツには約40の子どもの村があり、そのうち12が SOS 子どもの村で、続いて5か所のシュバイツアー子どもの村、そして2か所のペスタロッツチ子どもの村がある。その他には一組織一施設の子どもの村が約20か所存在する。それぞれ特徴を持っているが、大まかな分類としては、最も大きな組織の SOS 子どもの村とそれ以外の子どもの村という色分けになる。旧西ドイツでは SOS 子どもの村以外の子どもの村連合が集まって、年に2回の会合を重ねているそうである。

SOS 子どもの村の最大の特徴は、養育者を未婚、あるいは離婚した婦人に限定していることである。そのため一般家庭のような父親の存在はなく、子どもたちは父親の存在を求めている。それに対して、他の子どもの村では夫婦職員のみだったり（ペスタロッツチ子どもの村・シュバイツアー子どもの村）、夫婦職員や女子職員のための混合の形態（子どもと青年の村クリング）をとっているが、それぞれ長所と短所があるようだ。SOS 子どもの村のように婦人に限定すれば父親不在を招く。それに対して、村長・親方・教育者等の男性が父親の役割を果たすというが、十分補っているとはいえないだろう。しかしながら、SOS 子どもの村の婦人職員の平均勤続年数は約18年であるのに対して、夫婦職員では平均して3年程度しか勤めていないという報告がある。したがって、SOS 子どもの村では父親存在はなく、「おかあさん」としか一緒に暮らせないが、その代わりに永続した人間関係が保てるのである。ただし SOS 子どもの村のように、厳選されて2年間の養成を経た「おかあさん」でも、数年で他の職場に転職したり、結婚のために退職する婦人も存在する。

子どもの村における男性の役割について、Gmeiner (1985) は次の観点から論を進めている。すなわち、子どもの教育と人格形成という点から見ると、母親の影響は決定的な意味を持っている。特に乳幼児期には母親に代わるものはないといってよい。しかし、父親の役目は家族以外の人にも容易にできると考えられる。SOS 子どもの村では父親役の大部分を村長や親方や教育者が務めている。その他にも、多くの男性が関わっている。それ故、子どもの村の家庭において父親不在としている理由は、教育の全責任を母親に任せて男性存在を全く排除するためではない。乳児期・幼児期では父親の影響は僅かなものであろうが、それ以後の教育には母親が与えることのできない役割を果たすために父親の役割が重要となることを認識している。

Gmeiner は子どもの教育に男性がどんな意味を持つかを父親の機能面から十分考慮しているが、形態面だけから父親役の男性を子どもの村に定住させるのは無意味であると考えた。一般家庭を模倣するのではなく、家庭の本来の役割・機能をいかに生かしていくかを考え、そのためにふさわしい男性職員の役割を考察していった。両親が揃っている場合は、里子として子どもを受け入れる、ファミリー・グループ・ホーム方式の方が望ましいであろう。子どもの村で各家庭に住み込みの男性十数名が児童福祉以外の仕事を持ち、仕事の心配や人生上の問題を抱えて父親役を果たすよりも、村長が職員の協力を得て指導力を発揮する方が十分その責務を果たせると期待している。

金子 龍太郎

彼は両親を揃えないこと、つまり父親不在に対する批判には、次の諸体験から反論している。

(1) 夫婦が真に利他的動機から SOS 子どもの村の職員を望む場合は少なかった。他人の子どもの養育に家庭の犠牲を払おうとする夫婦はほとんどいない。

(2) 広くて新しい住居と保証された生活にひかれてというのが、過去多くの養父母志願の動機であった。そうした夫婦は新たな職場に救いを求めて来る場合が多く、自分たちの悩み事で周囲を煩わし、本来ならば救いを求めている子どもに注ぐべきエネルギーを浪費してしまう。

(3) 父親の職場を子どもの村内で確保するのは困難なので、父親は村の外に職を求めることになるが、現実には近郊では就職口は少なく、身をもてあますことが生じてきた。

(4) 夫婦の生活の場として、広い面積を確保する必要がある。それだけ余分な空間と余分な経費がかかり、子どもの村本来の、孤児育成に向けるべき資金が夫婦のために使われることになりかねない。

(5) 夫婦が SOS 子どもの村から解雇される場合、重大な問題が生じる。立ち退き拒否がそれである。また、自ら養育能力の欠如を露呈した夫婦がなお子どもの村に居座るという矛盾が生じる。

(6) 夫が SOS 子どもの村以外に職業を持った場合、家族内でその収入を浪費したり、他の目的に投資することも考えられる。そうすると、SOS 子どもの村の会計以外に、別の会計ができてしまうことになる。こうした会計の重複は公私混同を招き、好ましくない。

(7) 仕事を持つ夫のために、妻が尽くす必要も出てこよう。そうすると母親を求める他人の子どもたちは、夫婦にとって邪魔な存在になるかもしれない。これでは、子どもたちは再び見捨てられ、以前の状態に逆戻りになってしまう。子どもは自分たちから真の安らぎを奪う男性を父親と思わないであろう。

(8) もし夫婦に実子が生まれた場合、その家庭は危機に陥る。いかに献身的な養父母であろうと、実の子どもでない施設児と実子を完全に平等に扱うことはできないであろう。子どもたちは、自分が結局「他人」の子どもにすぎず、今まで自分に注がれてきた愛情も配慮もすべて贖物だったと思い込むだろう。

(9) 定職を持ち、しっかりとした生活を送る夫婦が養子を引き受ける場合は、養子を自分の家に引き取って世話するのが最もよい。そのために夫婦が私立の福祉機関に依存するのではなく、正式に養子縁組して、わが子として育てるのが最善の方法であろう。

(10) SOS 子どもの村以外に職を持つ父親は、養育家庭の協力者としては心理学的にも教育学的にも素人であり、子どもの教育という面ではあまり役に立たない。SOS 子どもの村に入所するような非常に扱いにくい子どもたちを養育するには、高度の専門知識と技術が求められる。しかしながら、素人同然の父親が村長を批判したり、自分の家族に干渉するのを拒否することも考えられる。そうなれば、SOS 子どもの村はその他の施設に較べても著しく劣った内容になりかねない。統制もきかず、専門的指導も不可能になってしまうかもしれない。

また、夫婦職員で自分の子どもがいる場合に、週末になると施設の子どものは置いて、自分の

子どもだけとハイキングに出かけたり、施設の子どもの通う学校とは違う学校に自分の子どもを通わせることが生じている。家族の形態としては、母子家庭より両親が揃った家庭の方が理想的であろうが、現実問題としては、夫婦職員の場合は公私混同したり、わが子と施設の子どもを区別して扱うという大きな問題が付いて回っているようである。

未婚あるいは離婚した婦人のみが「おかあさん」になれる SOS 子どもの村では、退職「おかあさん」のための住居を提供している。これはその他の子どもの村には見られない設備である。自分の人生よりも、恵まれない子どものために一生を捧げた婦人に対しての感謝と尊敬の気持ちの現れだといえよう。ただし、一人の婦人が一軒の家のすべてを司っている反面、各家の「おかあさん」同士に意見の違いがあり、家同士の仲が悪いこともあるようだ。村長には対外的な仕事も多く、十分「おかあさん」と話し合う機会が持てていない。敷地も広く、村長が知らない事柄も多い。

次に、入所児童に関しては、SOS 子どもの村を初めとして多くの子どもの村では少数の外国人が生活しているものの、原則的には自国の子どもに限定して養育している。それに対して、ペスタロッチ子どもの村ではアジア・アフリカの発展途上国や今日戦争をしている国々から避難してきた子どもかほとんどを占めている。

また SOS 子どもの村では施設外の公立小・中学校に通うのに対して、他の多くの子どもの村では施設内に学校を設けて施設の子どものみだけがそこに通う。どの子どもの村でも情緒に問題があり、学力の低い子どもを抱えて苦勞している。その中であって一般の子どもと同じ学校に通わせて社会性を身につけることを重視する立場と、施設の子どものみを専門的に教育しようという立場の違いが見られる。しかしながら、様々な問題に対応する治療教育の職員がほとんどの子どもの村に配置されており、心理学者が重要な役割を担っていることが伺える。

SOS 子どもの村の創始者 Gmeiner は信念の強い人物で、自己の理念を40年間貫き通しており、職員もその教えに忠実に従っている。ノーベル平和賞の候補に何度も名前が挙がった人物でもあり、職員の間ではカリスマ的存在といえる。その強烈な個性の元で大規模な SOS 子どもの村の組織は一体となり、40年を経過してもその養育形態はほとんど変わっていない。それに対して、他の子どもの村ではカリスマ的指導者はいないようである。さらに、多くの創始者は死亡して、当初の養育形態とは違ったものとなってきて、今日では一貫した理念はあまり感じられない。だが、SOS 子どもの村においても創始者 Gmeiner は1986年に他界した。継承者は彼の理念と実践を忠実に受け継いでゆくのだろうか。二代目の会長 Helmut Kutin は少年時代を SOS 子どもの村イムストで過ごし、その後も Gmeiner の片腕として、アジア地域の SOS 子どもの村の建設に辣腕を振るった人物であるから、こうした心配は杞憂に終わるのだろうか。

金子 龍太郎

引用文献

- Gmeiner, H. 1985 Die SOS-Kinderdörfer. SOS-Kinderdorf Verlag Innsbruck. SOS キンダーdorf ジャパン (訳) 1990 SOS キンダーdorf.
- Hilweg, W. & Posch, C. 1987 SOS-Kinderdorf Statistik. Sozialpädagogische Institut des Österreichischen Vereines SOS-Kinderdorf.
- Hörburger, F. 1967 Geschichte der Erziehung und des Unterrichts. Österreichischer Bundesverlag.
- Raithel, M., & Wollensack, H. 1980 Ehemalige Kinderdorfkinder Heute. Sozialpädagogische Institut des Deutschen SOS-Kinderdorf. e.v.
- SOS-Kinderdorf Verlag 1988 Hermann Gmeiner: Vater der SOS-Kinderdörfer.
- Then, V. 1985 Die SOS-Kinderdörfer in Deutschland. SOS-Kinderdorf Verlag München.

参考文献

- 平井信義 1981 施設保育における精神衛生. 小林提樹 (編) 施設保育・養護の実際 (改訂版), 37-50. 日本小児医事出版社
- Reinprecht, H. 1984 Abenteuer Nächstenliebe. - Die Geschichte Hermann Gmeiners und der SOS-Kinderdörfer -. Österreichischer Bundesverlag.
- Sauer, M. 1979 Heimerziehung und Familienprinzip. - Kritische Texte: Sozialarbeit, Sozialpädagogik -. Hermann Luchterhand Verlag.
- Schwerdtfeger, H. 1984 Ehemalige Österreichische Kinderdorfkinder Heute. Sozialpädagogische Institut des Österreichischen SOS-Kinderdorf e.v.
- Vollert, M. 1970 Erziehungsprobleme im Kinderdorf. Eine Untersuchung in den deutschen SOS-Kinderdörfern. Ernst Klett Verlag.